

村落社会と環境問題

琵琶湖博物館開設準備室 嘉田由紀子

本報告では、現在社会問題化している環境問題を狭義の「環境問題」ととらえ、それに対し、村落が本源的に有している存在基盤に根ざす環境問題を、広義の「環境」問題ととらえることから出発した。

村落が本源的に有している保全機能を「人間」「作物」「領土」という3領域から分析したのは川本彰である。この川本理論を下地にして、本源的な「環境」問題という視座からみると、「人間」領域では「生命と精神（文化）の維持継承」が、「作物」領域では「生産と収穫プロセスの維持継承」、「領土」領域では「耕作基盤としての土壤と水と大気の質的量的な維持継承」が課題となっていた、と解釈される。

それにたいして、狭義の「環境問題」視座からみると、「人間」領域では、問題の存在そのものがこれまでほとんど認識されていなかった。村落や農業がかかわる狭義の「環境問題」は、「作物」領域と「領土」領域にかかわる課題が主流であり、「作物」領域では、たとえば「農産物・食の安全性」や「有機農業」に代表される課題に焦点があり、「領土」領域では、「土壤流出／地力枯渇」「水質汚濁」「大気汚染」など、「破壊／汚染問題」等に焦点がおかれてきた。

本報告では、これまでの村落研究が等閑に付してきたふたつの課題について問題提起を行い、村落研究と広義、狭義の環境問題研究をつなぐ新しいパラダイムについての提案を行った。

そのひとつは、「人間」領域にかかわる本源的な「環境」問題研究と、狭義の「環境問題」研究のかかわりの問題である。これまでの村落研究において大きな蓄積があるイエ／ムラ論、コミュニティ論、合意形成論などが、現在社会問題化している水質汚濁や土壤枯渇、食の安全性などと切り結ぶ視点は“見えかくれ”している。その”見えかくれ”的構造を探りだすには、いわゆる一般化された狭義の「環境問題」を社会的に所与のものとするのではなく、その「環境問題」が存在する私たちの生産／生活現場に根ざした、個人としての「環境認識過程」、人と人の「コミュニケーション過程」、社会集団としての「道徳や権力の生成過程」というような、人間社会に本源的な生産／生活過程、社会過程をも分析の対象とする骨太い研究者精神が必要とされる。

ふたつ目には、「人間」領域と「作物」領域との関係性、「人間」領域と「領土」領域の関係性を、「人間自然相互作用系」という筋道をたてながら、いわゆる自然科学の領域を所与のものとするのではなく、自然科学方法論やそのパラダイムのあり方にまでふみこんで深めていく必要性があるという提案である。そのためには、作物学、土壤学、農業工学、水産学、林学など、農学系の部門はもちろん、生態学や水質化学、地球科学など、基礎的な理学分野や応用的な工学分野の研究者との相互乗り入れの研究が必要とされる。

それとあわせて、生活／生産の現場では、自然科学的課題も社会／人文科学的課題も、あくまでも”総体として”存在しているという現実をふまえながら、生活者と科学者が相互に向き合って現場の問題を解釈しながら共に将来の方向性を探る、という姿勢が求められている。それを環境問題への「科学的アプローチ」と「生活論的アプローチ」の複眼的視野として問題提起を行った。